

説教 『言、命、光、響き』山本護 牧師
 聖書 詩編 19:2~5a/ヨハネによる福音書 1:10~13

今日からクリスマスを迎えるための「待降節=アドベント」に入る。「待降」という言葉には、神の御子が天から「降りる」のを「待つ」垂直イメージがある。一方「アドベント=Advent」という言葉には「到来する」の意味もあり、ふらりとやって来る旅人のような水平イメージがある。誕生される御子イエスは神なのか、それとも人なのか。この二つのイメージ、両方共に欠かすことはできない。

「言は世にあった。世は言によってなったが、世は言を認めなかった(ヨハネ 1:10)」。御子イエスは神と共に、神として在った「言(1:1)」。「言の葉(コトバ)」ではなく「言(コトバ)」。うまい日本語表記だ。「言」は御心そのものであったがために世はこれを認めず、生まれる時からすでに苦難が暗示されている。「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった(1:11)」。御自分の民でさえ、こうなのだ。

民が十字架を要求する憎悪の興奮が想起される(19:15)。そんな暗い嵐にもまれながら、「言」という小さな光が灯る(1:4)。「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた(1:12)」。とはいえ、言を受け入れても、十字架で消失してしまわなかったか。確かに弟子らしい姿勢は霧散してしまう。だが信仰を失った弟子のど真ん中に(20:19)、新たな、真実の、消えることのない光が灯り、「言」を拒絶する世(1:5)へ広がった。私たちの信仰は、そんな弟子たちが命懸けで手渡しして来た灯。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった(1:4)」。私たちは兄弟子から、信仰という光を手渡された。命の光があるから、私たちは暗闇にも、死にも怯まない。

「その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう(詩編 19:5a)」。昔、詩人が語ったように、その「響き」は、「言」は、「命」は、「光」は、世界の果てにいる私たちに手渡された。まさに「Advent=到来」。弟子は皆「adventure=冒険」し、「advance=前進」し、クリスマスの奇跡を伝えていく。それでは、手渡されたこのかけがえのない「言」を、弟子となった私たちはどう扱えばいいのだろうか。

「その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた(ヨハネ 1:12)」。「資格」とは間違えやすい言葉。直訳すれば「神の子となる(特別な)力」か。「言は、自分の民のところへ来たが」、多くは「言」を拒絶し、少数がこれを受け入れた(1:11~12)。信じる私たちには、迷うことではない。「言」はすでに到来しているのだから。兄弟子から手渡された、信じて神の子となる「力」を誠実に使うほかならう。

降誕の秘儀は「神が人となった」ことだけに限らない。私たちをも「神の子」とする奇跡。熱心な信仰への褒賞ではなく、今、この私たちのまま、新たに「神の子」として生まれる直すこと(1:13,3:6~7)。神は全能で、全宇宙の何をどうすることもできる。ではなぜ、ちっぽけな私たちをそこまで遇して迎え入れようとされるのか。この福音書と同じ著者による「Iヨハネの手紙」は次のように語っている。

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりだ(Iヨハネ 3:1)」。愛されるにふさわしいものなどないが、私たちは「神の子」とされるほどに愛されている。神に愛されているこの奇跡が、私たちの本源的な「力」。



【おまけのひとこと】

キリストはいろいろに表現される 言か 命か 光か いや響きか 五感と心身で触れるキリスト
 分かりかけると 風のごとく立ち去られてしまう 信じた神の子はそんな旅をするのか(ヨハネ 3:8)